

「ライトノベルの一流流」としてのソノラマ文庫 ——メディア史的アプローチからの再検証——

山中智省（目白大学）

概要

本発表では、1975年に朝日ソノラマが創刊したソノラマ文庫を“ライトノベルのメディア史”のなかに位置づけた上で、同文庫が「出版メディアとしてのライトノベル」の特質をいかに形成・獲得していったのかを再検証する。具体的には、ライトノベルの萌芽・誕生期である1970～80年代を射程に、メディア史的な観点を導入したアプローチにより、ソノラマ文庫が同時代の若年層向けエンターテインメント小説に残した成果や課題をふり返りながら、同文庫が「ライトノベルの一流流」となり得た要因に迫っていく。

キーワード：ライトノベル、出版メディア、朝日ソノラマ、ソノラマ文庫、メディア史

問題の所在

ライトノベルは現在、一般には「マンガ・アニメ風のキャラクターイラストをはじめとしたビジュアル要素を伴って出版される若年層向けエンターテインメント小説」として広く認知されている。その起源をいつ／どこに求めるのかは諸説あるが、とりわけ、1970年代に登場してきた秋元文庫（秋元書房）、ソノラマ文庫（朝日ソノラマ）、コバルト文庫（集英社）などを源流と見なす説が有力視されており、これらを起点に著名な作家、作品、ジャンル等の系譜をたどったライトノベル史（ラノベ史）の成果も数多い。

こうしたなか出版史研究では、例えば玉川博章が「文庫というメディアからの出版史」の不在を指摘し、「ヤングアダルト文庫」（十代の青少年をメインターゲットに据えて企画され、娯楽小説を収録した文庫判の叢書）を対象とした出版史の構築を試みている⁽¹⁾。玉川の研究において重要なのは、「現代の少年、少女小説について、それを維持してきたメディアである文庫の歴史として叙述し、基礎資料としての研究の素地を固めると共に、現代出版史の一部として青少年向けにターゲットを絞り独自の発展を遂げた文庫について考察」という、出版史研究ならではの問題意識でライトノベルを扱った点である。その結果、レーベルの創廃刊状況や作家・作品の単なる列挙に終わることなく、「ヤングアダルト文庫」が「出版業界で青少年向け読み物を送り出す独特の存在として地位を得た」過程を含め、現代日本の出版史や読書環境におけるその位置づけを明らかにしている。他方で、このような出版史研究からのアプローチは、新たなライトノベル史（ラノベ史）を導き出せる可能性を持ちつつも、研究の実践は未だ手薄な状況にある。

そこで発表者は、前述した玉川の問題意識と、出版史研究に見る現状の課題を念頭に、ライトノベルを「多彩なジャンル、メディア、文化を複合させた活字コンテンツを戦略的かつ積極的に生み出し、若年層を小説の読者や作者として獲得することを企図した出版メディア」と捉え直した上で、その段階的な発展過程をメディア史的なアプローチによって実証的に探りたいと考えている。なお、本発表はこの取り組みの一環であり、JSPS 科学研究費補助金 20K12927

(若手研究「ライトノベルから見た現代日本の「文学」の変容／再編に関する研究」)の助成を受けて実施するものである。

「出版メディアとしてのライトノベル」への着目

発表者は以前、ライトノベルを活字にとどまらず、多彩なジャンル、メディア、文化の要素を撰取した「複合的な文化現象」であると定義した先行研究⁽²⁾をもとに、出版史研究の視座から行うライトノベルの研究に関して、次のような見解を示していた(引用文の下線は発表者による)。

ライトノベルが持ち合わせている特質に関しては、「マンガ、ゲーム、映画、アニメ……。ラノベはあらゆるジャンルを取り込み、進化し続ける」といった見方が前々からなされており、小説(活字)だけでなく、周辺のメディア、ジャンル、文化などとの関係のなかで、その誕生・発展をめぐる歴史が語られてきた。(略)「複合的な文化現象」との指摘はまさにこうした現状を踏まえつつ、ともすれば個々の作家・作品に焦点が当たりがちなライトノベルを、複数の視座から探究すべき対象と捉え直した点で示唆に富むものと言えよう。(略) 出版史研究の実践例としては、ライトノベルという文化現象を成立させてきた／いる出版の諸活動に着目して、その歴史の変遷を明らかにする取り組みが挙げられるだろう。⁽³⁾

「出版の諸活動」とは、個々のレーベルや雑誌の創廃刊、記念碑的ヒット作品の刊行、著名作家のデビューといった出来事は無論のこと、特定の作品群を「ライトノベル」として生産／再生産する出版業界のシステムとネットワーク、広告・販売戦略なども想定しておく必要がある。なぜなら、出版史研究の強みはその研究の性格上、作家・作品の傾向をつぶさに分析していくことはもちろんなのだが、むしろ「出版」を軸とする産業指向のアプローチから、ライトノベルを生み出す産業構造自体やその変化を歴史的に問う点にあると考えられるためだ。管見の限り、こうした研究上の強みを生かした「出版史」の試みはまだ少ないことから、今後「出版史研究の視座からライトノベルをどう見るか？」を検討する際、無視できない課題となるのは間違いないだろう。⁽⁴⁾

これらを前提に本発表では、ライトノベルの誕生・発展過程へと迫るにあたり、ライトノベルのあり方そのものを規定してきたと考えられる存在(＝出版メディア)に着目していく。加えて、ライトノベルが「複合的な文化現象」という特質を持つ以上、「既存の出版メディアに何がどのように複合してきた／いるのか」を見極めることが肝要と思われるため、実際の調査・分析にあたっては、「単純なメディアの交替史・興亡史ではなく、古くからのメディアに新しいメディアが重層化していく過程、しかも重なりあいながら相互に組みあわさっている状態を分析」⁽⁵⁾するという、メディア史的な観点からのアプローチを試みる。したがって、本発表の大きな目的の一つは、「小説を成立させてきた既存の出版メディアに対して、新たにどんなメディアがどのような経緯で複合を果たしながら、「出版メディアとしてのライトノベル」を誕生・発

展させてきたのかを、個々の事例を対象に調査・分析する」ことにあると言えよう。

なお、ここで言う「小説を成立させてきた既存の出版メディア」とは、長らくライトノベルの主流を占めてきた文庫を想定している。また、本発表では「出版」を、「情報を書籍・雑誌などの印刷物、あるいは DVD やネットワークなど電子的方法によって複製し、頒布・販売の方法で普及させる活動」⁽⁶⁾と見なし、一方「メディア」とは、「伝達・複製・保存・再生などに関わるマテリアル、デバイス、インフラストラクチャーとそれにとまなうコンテンツ」⁽⁷⁾であると捉えておきたい。その上で、活字とビジュアル要素の双方を伴って出版される小説、ならびにそれらの書物（モノ）としての形式や読書環境のほか、若年層の読者に訴求する広告・販売手法の基盤を成す商業戦略、活字コンテンツの生産・供給を担うシステムやネットワーク、プラットフォームの形成、整備、普及に秀でた出版メディアの一つとして、ライトノベルを定義する。すなわち、本発表が想定する「出版メディアとしてのライトノベル」とは、「多彩なジャンル、メディア、文化を複合させた活字コンテンツを戦略的かつ積極的に生み出し、若年層を小説の読者や作者として獲得することを企図した出版メディア」ということになる。

「ライトノベルの一流源」としてのソノラマ文庫

本発表では、先に見た玉川の問題意識を踏襲しながら文庫というメディア／場に着目し、「多彩なジャンル、メディア、文化を複合させた活字コンテンツを戦略的かつ積極的に生み出し、若年層を小説の読者や作者として獲得することを企図した出版メディア」であるライトノベルの成立史を、言うなれば“ライトノベルのメディア史”として構築したいと考えている。今回はそうした試みの一環として、1975年に朝日ソノラマが創刊したソノラマ文庫を主要な調査・分析対象に据えている。その上で、当初は既存の少年小説・ジュブナイルの色合いが強かったこの文庫レーベルが、同時代の多種多様なメディアとのつながりや、高千穂遙、菊地秀行、夢枕獏、笹本祐一といった気鋭作家の登場などを受けて、どのようにして「ライトノベルの一流源」となり得たのかを、各種の文献資料や関係者の証言からあらためて検証・確認していく。

ソノラマ文庫を「ライトノベルの一流源」と見なす説については、すでに大森望、三村美衣、大塚英志らをはじめ、数多くの論者が述べるところとなっている。その根拠としては、ソノラマ文庫の刊行作品に見られたマンガ・アニメ的な要素や、複数のジャンルを内包したラインナップの豊富さ、「ビジュアル世代」とも呼ばれた若年層の読者をひきつける内容のライトさなどが指摘されてきた。そして、ソノラマ文庫はライトノベルもさることながら、SF、ファンタジー、ミステリーなどのジャンル小説史に位置づけられ、評価されてきたのである。本発表では、これらの先行言説の指摘を踏まえつつも、新たに“ライトノベルのメディア史”の枠組みのなかでソノラマ文庫を捉え、同文庫が「出版メディアとしてのライトノベル」の特質をいかに形成・獲得していったのかを再検証していく。

1 玉川博章「現代における青少年向け書籍の発展—ヤングアダルト文庫出版史」、『出版研究』第35号、日本出版学会、2005年3月、41～64頁。

2 一柳廣孝・久米依子編著『ライトノベル研究序説』（青弓社、2009年）において一柳廣孝は、「ライトノベルは単なる言語表現の総体ではない。たとえば「特定のレーベルから刊行された文庫として、パッケ

ージングされた物語」という把握の仕方は、ライトノベルの一面を指摘してはいても、その本質ではない。現代におけるライトノベルは、何よりもまず、複合的な文化現象である」(13頁)と指摘している。

- 3 山中智省「第3章 ライトノベルへのアプローチ」、日本出版学会関西支部会編『出版史研究へのアプローチ—雑誌・書物・新聞をめぐる5章』、出版メディアパル、2019年、67頁。
- 4 前掲注3に同、68頁。
- 5 有山輝雄「はじめに メディア史を学ぶということ」、有山輝雄・竹山昭子編『メディア史を学ぶ人のために』、世界思想社、2004年、15頁。
- 6 川井良介編『出版メディア入門(第2版)』、日本評論社、2012年、3頁。
- 7 難波功士『メディア論』、人文書院、2011年、6頁。